

近世の京都円山界隈における環境デザインに関する研究 Human environmental design around Maruyama, Kyoto in Edo period

出村嘉史*・川崎雅史**・田中尚人***

Yoshifumi DEMURA*・Masashi KAWASAKI**・Naoto TANAKA***

1 研究の背景と目的

地形や自然、都市的位置などの環境のポテンシャルを積極的に利用することによって、人々に臨場感のある優れた景観体験を与え、レクリエーションや文化的活動を促すことは、環境デザインの基本的な理念である。この景観体験を「愉しみ」と定義する。

京都には長い歴史の中で環境と密に結びついた公共的空間が存在する。本研究で対象とする円山界隈は、現在庭園や料理屋が並び、花見席をはじめ四季折々の愉しみを有する、市民に根付いた公園（円山公園）となっている。その領域は、近世においては安養寺、長楽寺、双林寺、祇園社（八坂神社の前身）の境内を含み、東山の広い山辺を形成し、かつ都市の中心部とも結節することから、地形や自然、都市的位置などの環境的ポテンシャルを利用した、全国でも固有な公共空間としての特異性を持つ。そこには、近世から現代に至る長年に渡っての環境への配慮と空間創造の知恵が集積されていると考えられる。

近世の景観を扱った研究としては、江上・篠原¹や橋本・堀²らによるものがある。また、丸山³の研究により近代以降の円山界隈の姿が明らかにされている。しかし、近世の公共的空間について、人々による場の共有の仕方に注目した研究は稀少である。本研究は、公共空間における環境デザインの新たなコンセプトを探求するための研究の第一歩として、絵図や文献などの歴史的資料の分析をもとに、近世

の京都円山界隈の空間創成の手法を把握し、環境への関わりと行為・活動をも含めた空間デザインの固有性を把握することを目的としている。

2 場所のポテンシャル

人が場において愉しみを享受できる公共空間を「愉しみの共有空間」とする。この空間は、近世の円山界隈において成立していたことが、諸文献からうかがえる（表1）。愉しみの共有空間がここに展開する前提には、この場所に本来備わるポテンシャルがあると考えられる。

(1) 山辺であること

円山界隈は、第1に山辺としての地形に特色がある。山辺の上部は時宗の安養寺、長楽寺、双林寺が、下部は祇園社が所有しており、それらの間を真葛ヶ原が見つないでいた。山辺故の特色を以下にまとめる。

- ・視覚的多様性：3次元的に移り変わるシーケンス、眺望による「あちら」と「こちら」のコントラストなど、視覚の楽しみ。
- ・山の存在感：洛中の人々が親しみ仰ぎ見る東山への導入部であること、また中に抱かれる感覚。
- ・優越感：洛中遠望による特殊感覚。
- ・自然美観：癒し、和みの感覚、霊的感覚。

(2) 歴史性、環境

洛東に連なる東山の中に位置し（図1）、円山界隈を含めこの周辺一帯は古くから寺社仏閣の多く建てられた地域であり、近世において既に長い歴史の上に出てくる名所（名勝）の1つであった。

表1の資料においても、その歴史的なオーセンティシティを説くものが多い。歴史の大きな流れも一つの環境（風土）としてこの場所性を高めていると言える。

Key Words：近世円山、景観、空間整備・設計

* 学生員 京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻修士課程
(〒606-8501 京都市左京区吉田本町 Tel.075-753-5123)

** 正員 博士(工) 京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻

*** 正員 修士(工) 京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻

		安養寺	長楽寺	双林寺	真葛ヶ原	祇園社
京師巡覧集	寛文13/1672	○●○	▽○	▽○	▽○	▽
出来齋京土産	延寶5/1677	▽●○	▽	▽	—	▽
菟藝泥赴(つぎねふ)	貞享元/1684	▽●	▽	▽	—	▽○
名所都鳥	元禄3/1690	—	—	—	—	▽
京内まいり	宝永5/1708	▽●	▽	▽●	—	▽
都名所車	正徳4/1715	▽●	▽	▽	—	▽○●
京城勝覧	享保3/1719	○●○	—	—	—	▽○●
京都めぐり	享保3/1719	●○◇	◇	◇	—	▽◇
都名所図会	安永9/1780	▽◇	▽○●◇	▽○●◇	○◇	▽○●◇◆
都名所図会拾遺	天明7/1788	—	—	○	○	▽○●○◆
都林泉名勝図会	寛政11/1799	▽○●◆	▽○●	▽○◆	—	▽●○◆
花洛名勝図会	安政元/1854	▽○●○◇◆	▽○●○◇	▽○●○◇	○◇	▽●○◆

▽歴史の記述 ○風景美の記述 ●「行楽」「遊興」などの記述 ◎人の愉しむ様子の記述 ◇絵図入り ◆人の行為が分かる絵図入り

表 1 近世の文献における円山界限に関する記述(筆者調べ)

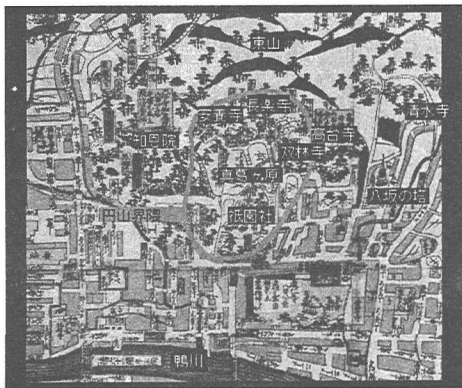


図 1 円山界限とその周辺(筆者作成)

3 装置と場づくりの行為

愉しみの共有空間がつけられるには、上述した場所のポテンシャルに加えて、主体が愉しみを感ずる為のしくみが必要とされる。このしくみは、主体と場所をつなぐ「装置」によって成り立つと考えられる(図2)。

円山界限では如何に場づくりを進めていたのかを数ヶ所に分けて検証する。

(1) 山辺上部

江戸初期に山辺上部の諸寺境内に数々の塔頭が出現した。それらは当時の文化人の手により己の生活を愉しむために造られたものであった。それぞれが庭園林泉が作りお互いに庭園美を争ったという⁴。円山安養寺においては6つの塔頭が建ち、総称して六阿弥(りくあみ)といった。そのうち左阿弥については花洛名勝図会に経緯が記されている。

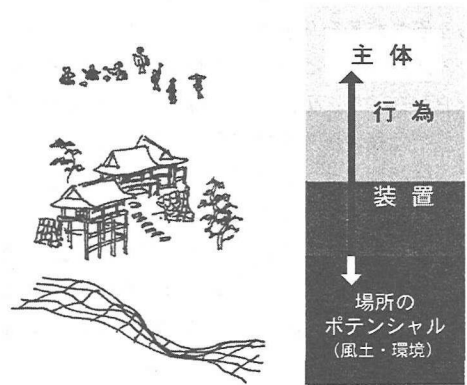


図 2 主体と場所のつながり(筆者作成)

建立者は織田頼長(道八)という。彼は織田信長の弟であり有楽流の祖である茶人の有楽齋の息子で、庭園も彼の指揮で造られた。このように、各塔頭の庭園などの空間づくりは、当時の文化人の手によるものであった。

その空間構成を次にまとめる。

地形に対する建築の収まり：擁壁をたてて土台を造ったり、斜面に対して張り出した懸造(かけづくり)の建築を用いることによって建築が斜面上に上手に収まっている(図3)。

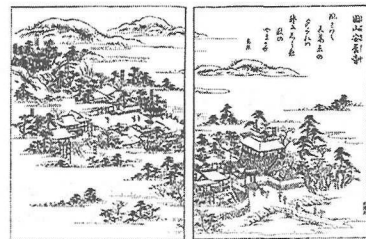


図 3 地形に対する収まり(都名所図会)

視点場の多様性と視線の多方向性：各庭園の小敷地の中に、道廻しや築山による様々な視点場を設け、多様な景観体験を創出している（図4）。

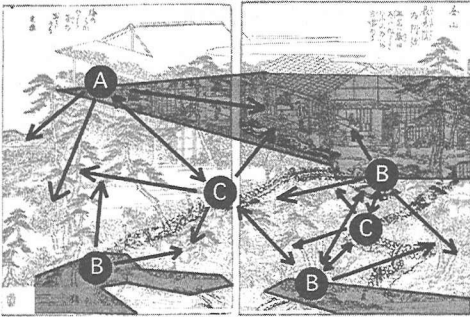


図4 左阿弥における視覚操作（筆者作成）

周囲とのつながり：隣接する各塔頭は、境界を曖昧にして互いに断絶せず、視覚的、行動的な接続を演出している。また、町や山などの遠景を借景として庭園に取り入れている。

江戸中期よりこの界隈の寺々は、明和（1764-1772）の頃から、それぞれ塔頭のレンタルスペース（席貸：せきがし）を始めた。庶民に対して場所を開く席貸という形態が、場所のポテンシャルを引き出し、人々に楽しみを与え、共有空間性を高めた。席貸には次のような内容が含まれていたことが諸絵図から読み取れる。

文化的会合：席貸の利用として、文化的会合が盛んであった。菊会、立花・生花会、素謡会、書画展などが行われ、「東山新書画展観」という洛中の町人と画家との交流を図る画期的な催しもあった。図5は六阿弥の一つ、正阿弥で行われた書会の様子である。

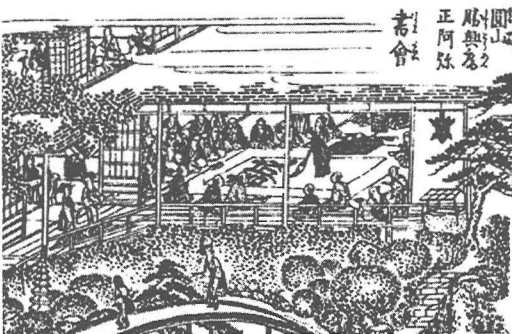


図5 正阿弥の書会（都林泉名勝図会）

宴席：宴席は席貸の中でも主要な形態であったと思われる、この「場」を盛り上げ、楽しみの共有空間性を高めていた。席貸に至るまでの経緯において、各塔頭において円山界隈の宴席において特徴的だった事は、宴席の場に「やまねこ」と呼ばれた芸妓が出入りした事である（図6）。この芸妓達は、近接する下河原という地から出稼専門で通い、芸妓の中でも格式が高く、起源は太閤の北政所の養成したものであるという。



図6 やまねこの宴席（都林泉名勝図会）

山辺上部における楽しみの共有空間の出来方を時間の経過に留意してまとめたものが、図7である。最終的に盛況となった席貸というシステムは、過去に用意された建造物などの装置を活かした仮説的な場の創成であり、山辺の環境を積極的に体験する有効な手段であったといえる。

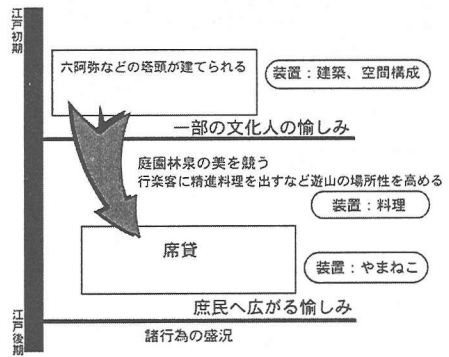


図7 山辺上部の楽しみ推移（筆者作成）

(2) 山辺下部

山辺下部の祇園社周辺でも、ポテンシャルの高いオープンスペースに仮設的な様々な装置を設け、楽しみの共有空間性を得ていた。図8は祇園社北林で夜桜に人々が集い遊ぶ様子である。ここでは桜の植樹、掛茶屋（露店）などの装置が、人々の楽しみを盛り上げる触媒であったと言える。

境内の中には更に沢山の人が集っていて一つの遊興空間が広がっていた(図9)。江戸末期になって愉しみの場を培う上で、「絵馬堂」、「神楽殿」、「茶屋」などの装置が登場している。特に多くの茶屋(掛茶屋)が境内に建てられ、賑わったことから、社境内が現在とは違う認識で捉えられていたことをよく表している。



図8 祇園林夜桜(花洛名勝図会)



図9 祇園社境内(花洛名勝図会)

山辺下部の愉しみの共有空間は次のようなしくみできていたことが分かる(図10)。

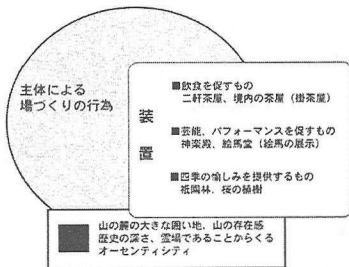


図10 祇園社の愉しみの共有空間(筆者作成)

(3) 山辺中部(真葛ヶ原)

真葛ヶ原は、空間的には周囲の寺社境内で繰り広げられる愉しみの共有空間を結ぶ役割を果たし、視覚的にも山辺上部・下部間の視界を通してお互いの

存在を接続していた。ここの固有性は連結性であったといえる。

諸資料の記述では、詠まれた唄、または唄に関する記述が多く(6掲載例中4例)、そのモチーフとして風、月などが使われている。ここはがらんと開けた雰囲気が愛され保存されてきたことが分かる。

また、ここには江戸中期以降文人と呼ばれた人々が好んで住み、知恩院門前・真葛ヶ原一帯には村瀬栲亭、上田秋成、祇園井持や池大雅、玉蘭など著名な文人がいたという⁵。文人村的な要素もあった。

真葛ヶ原においては、装置などの構成が不明確、または存在しておらず、緩やかなつながりの空間として、自然発生的配置で形成されていたと思われる。

4 おわりに 一結論一

以上の分析より明らかとなった、近世円山境界における環境デザインの固有性は以下にまとめられる。

(1) 視覚的な遊び

各種装置の利用により多様な視覚の遊びを創出

- ・寺社境内を含み込み、山辺の大景観を演出
- ・地形と密に関わる空間意匠

→時宗の塔頭、真葛ヶ原の存在、祇園林、桜等

(2) 飲食の積極的な導入

景観を愉しむことと飲食をセットにする文化

- ・席貸における宴席による場の価値の向上
- ・境内での飲食が賑わいの空間を創出

→席貸、花見席、掛茶屋

(3) 持続的に環境を維持するしくみ

場づくりを常に続ける意識による人の行為

今後の課題としては、この抽出した概念が近代以降現在に至る公共空間においてどのような形でデザインされてきたかを考察する事、また今後の公共空間づくりにこれらの手法を活かしていく事であろう。

参考文献

- ¹ 江上雅彦・篠原修：正保絵図を用いた桑名城郭の微地形復原、1999
- ² 橋本政子・堀繁：江戸の河岸の空間デザインとその規範に関する研究、1997/江戸の水辺の樹木・緑地の立地とそのデザイン規範—江戸名所図会等を分析資料として—、1998
- ³ 丸山宏：京都円山公園成立前史、1984/円山公園の拡張、1998
- ⁴ 田中緑紅：なつかしい京都、京を語る会、p.12、1958.1
- ⁵ 林屋辰三郎・森谷尅久：江戸時代図誌第2巻京都二、1976.11